

能の「見る」型における表現構造

湘北短期大学 原 郁子

能において目による表現は演技の要として世阿弥の時代から伝書に書き記されてきた。例えば江戸時代の能伝書『八帖花伝書』には「能と申は、目遣ひに帰したることなり」¹とある。世阿弥伝書『申楽談儀』²には当時評判をとった名人の演技として、演者の肉眼による心情表現が記述されている。時を経た今日の能では、能面の目や役の目による表現を生かすために演者の肉眼による表現は抑制されている。今日に至るまで演者は目による表現を重視しているが、目による表現の形態は時代と共に変化している。本研究では、演者が何かを見るという型を総称して「見る」型と呼んでいる。

【研究目的と方法】

本研究の目的は、能の演技において「見る」型を通して表現するという構造を解明することである。従来、能の研究は文献研究を中心としてなされており、演技的側面からの研究はあまりなされてこなかった。「見る」型について触れた研究はごくわずかで³、いずれも論の一部として断片的に述べたものである。

研究方法は、能伝書を対象とした文献研究と、演能VTR、型付、詞章を資料とした実技面の分析という両面からのアプローチを行った。能の「見る」型における表現に焦点を当て、能伝書を対象とした思想や型の検討の上に、能作品における実技の技法の分析を加えることによって、「見る」型の表現内容や役割、表現構造、理想とする身体の在り方について考察する。

研究対象は、文献では能の思想的基盤となる世阿弥の伝書とその流れを汲む金春流系統の伝書を対象とした。思想面について、世阿弥著の『風姿花伝』『花鏡』『至花道』『二曲三体人形図』『遊楽習道風見』『拾玉得花』『申楽談儀』の7伝書、及び禅竹著の『六輪一露之記』『五音三曲集』の2伝書を対象とした。⁴ 変革期の能における目の演技に関する記述については、小田幸子の先行研究⁵を元に、『禪鳳雑談』『金春安照能伝書』『八帖花伝書』『宗節仕舞付』を対象とした。⁶ 対象としたVTRは代表的な三番目物〈松風〉キリの喜多流友枝喜久夫と、観世流梅若万三郎⁷の演技を選んだ。型付は『喜多流囃子仕舞型付』『観世流仕舞稽古型付 二』である。⁸

【研究結果】

世阿弥伝書には、「有」をあらわす「無」とい

う概念があり、この概念が型の抽象化の源流となると考えられる。「無」の例として挙げられている「器」や「無色の空体」という意識レベルでの心の在り方を形象になぞらえた言葉は、今日の能では、抽象化された型や型に規定された演者の身体を表すものとしてとらえられる。又禅竹伝書の六輪一露の図からは、円を演者の身体や型ととらえると、様々な表現が映しだされるような身体の在り方が見出される。

次に、変革期の伝書から目による表現に関する記述を抽出し、独自に設定した項目をもとに分類した結果、目による表現内容には、〈事物を表すもの〉〈情景を表すもの〉〈対象への想いを表すもの〉〈役柄を表すもの〉〈所作をする身体への意識〉〈周りの空間への意識〉があることが導き出された。

さらに、現代の能〈松風〉キリの友枝喜久夫と梅若万三郎の演技を対象に、劇空間の構築について空間構成図を作成して分析した結果、友枝の空間構成は、松風という主人公と松風の行平への想いに焦点が絞られ、より濃密に松風の恋慕の情を表現していることが分かる。又、より濃密な心情表現の見られた友枝の演技を分析した結果、心情を表す技法として、独特の間合いを生むタメ、イキのツメヒラキが重要であることが判明した。

以上をもとに、「見る」型の技法と基盤となる思想との関連から現代の能における「見る」型による表現構造について考察した結果、無色透明な身体が、役の心情を変換し、タメやイキのツメヒラキによってエネルギーを放出することで色に染まり、一方では観客側の投影によって表現内容を映し出すという、能の理想とする身体の在り方ととらえることが出来た。

¹ 林屋辰三郎校注 1995 日本思想大系『古代中世芸術論 芸の思想道の思想2』東京：岩波書店 p. 604

² 『世子六十以降申楽談儀』の略称。

³ 小田幸子 1984 「能の演技と演出—装束付・型付をめぐる諸問題」『能楽研究』10号、横道萬里雄 1993 『岩波講座能・狂言Ⅳ 能の構造と技法』東京：岩波書店

⁴ 表章 加藤周一 1995 日本思想大系新装版『芸の思想 道の思想Ⅰ 世阿弥 禅竹』東京：岩波書店を用いた。

⁵ 脚注3 参照

⁶ 『禪鳳雑談』『八帖花伝書』は日本思想大系、それ以外は能楽資料集成を用いた。

⁷ 友枝は仕舞〈松風〉キリ1982 NHK放送、梅若は舞囃子〈松風〉キリ 1938 NHK 名人の面影

⁸ 前者は、喜多六平太 1981 東京：東京喜多流刊行会、後者は観世左近 1990 東京：檜書店である。